

『觀所緣論』小記

木村 誠 司

I

昨年、機会を得て、陳那（^{じんな}Dignāga, デイグナーガ）作『觀所緣論』^{かんしよえんろん}*Ālambana-parīkṣā*とその自注 *Vṛtti* を読むことになった。荷が重いと感じていた。作者も書名も知ってはいたが、内容を理解する自信もなかったからである。個人的には、陳那やその影響下にある法称（^{ほっしょう}Dharmakīrti, ダルマキールティ）の思想には興味を持ち続けてはいたのだ。けれど、彼らの思想は難しすぎて、歯のたないことを痛感するばかりだった。

そこで、いっそ、彼らの先達、世親（^{せしん}Vasubandhu, ヴァスバンドゥ）から辿っていけば、陳那や法称もわかりやすいのではと考え、世親の『俱舍論』^{くしゃろん}*Abhidharmakośabhāṣya* に手を染めてみることを思いついたのが10数年前である。苦肉の策というわけで、ここ何年かは、『俱舍論』を扱ってきたものの、これをものにするのもひどく難事であった。夢想したように、陳那・法称にまで行きつくのか途方に暮れていた。そうした中で、『觀所緣論』に接することになり、思い切って読んでみることにした。読み方は至極、非学問的なものだった。山口益・野澤静證『世親唯識の原典解明』¹⁾の巻末に付されたテキストを、注釈も参照せず、そのまま読むという乱暴極まりない方法を取った。何の情報も入れず、まっさらな状態で接してみたかったのである。小編でもあったので、一応、半年ほどで読了したが、当然不全感が残った。さらに、関係する研究を知るにつれて、『觀所緣論』そして作者陳那の実像は遠いものとなって、霞の彼方にぼんやりと見え隠れするばかりであった。私の『觀所緣論』研究は五里霧の中にある。以下は、論文とは到底言えないし、首尾一貫した報告でもない。強いて言えば、次のステップへのメモであろう。

II

はじめに、陳那の名前について、見ておきたい。何歡歡氏の「〔陳那〕の名称に関する考察」は、陳那という奇妙な漢訳名に焦点をあてた論文である²⁾。何氏はインドの用例にも、細かに触れ、ジャイナ教の論書に関して、次のように述べている。

六～七世紀のジャイナ教学者 *Siṃhasūri* [シンハスーリ] が著した *Nyāyāgamānusāriṇī Nayacakravṛtti* [『ナヤチャクラ注、理経随順』] では、*Dinnena* (=Dignāgena) という *Diṇna* の具格形の用例も確認される³⁾。

実際に、『ナヤチャクラ注、理経随順』⁴⁾ のその個所には、こうあった。

ディンナは世親の知覚定義を否定し・・・⁵⁾

dinnena vasubandhupratyakṣaḥaṣaṣaṇaṃ dūṣayatā (p.96,l.6)

さらに長い脚注が、付されていた。以下のように記している。

「その対象からの知が、知覚である」と知覚の定義を『論軌』*Vādavidhi*⁶⁾ で、仏教の師世親が表明した。世親の弟子ディンナ、「ディンナ」とはディンナーガ自身の別名である。ディンナは、自分の師世親の知覚定義を批判することを望んで・・・

‘tato ’rthād vijñānaṃ pratyakṣam’iti pratyakṣaḥaṣaṣaṇaṃ **vādaviddhau** bauddhācāryeṇa **vasubandhunā** ’bhīhitam/vasubandhoḥ śiṣyo **dinnaḥ**/‘dinnah’iti ca **dinnāgasyaiva** nāmāntaram/dinnena svaguror vasubandhoḥ pratyakṣaḥaṣaṣaṇaṃ dūṣayitumkāmena... (p.96,l.19-20)

上の記述からすれば、当時、陳那は「ディンナ」または「ディンナーガ」どちらとも呼ばれていたと受け取れる。「師に反旗を翻した」「二つ名を持つ人物」が、陳那であるとするならば、その評価はどうだったのだろうか？『ナヤチャクラ』やその注において、陳那は決して粗末に扱われてはいない。師とされる世親の『俱舍論』そして陳那の『集量論』*Pramāṇasamuccaya* は同じような頻度で引用されている。両者への注目度は同等と見てよい。こう述べる根拠は、何年か前、パラパラと『ナヤチャクラ』や『ナヤチャクラ注、理経随順』のページをめくっていたことによる。もっとも、私が見たのは、極微 (*paramāṇu*, パラマヌ、原子) 論を議する個所の1部だけだった。その際、シンハスーリの意図は恐らく、次の言葉に集約されると感じた。

1つの素材である極微は、いつでも、超感覚的 (*afindriya*) であるのに、〔『俱舍論』では、それを〕把握される存在とするのだが、「どうして、[1個の極微を把握するような場合、つまり] 1つの素材によって、視覚が起こるのか？」〔と師は疑問を投げかける〕。

ekasya ca dravyasya paramāṇoḥ sarvadāpy atīndriyasya grahanabhāvād **ekena dravyeṇa kathaṃ cakṣurvijñānam utpadyate?** (p.80, //.19-20) ⁷⁾

これは『俱舍論』の有名な一節を踏まえている。詳細は、機会があれば、後日報告しよう ⁸⁾。

さて、一見、上記のシンハスーリの意見は『観所縁論』には無関係に写るかもしれない。しかし、その解明に大いに、資すると思われる。この後直ぐ、『ナヤチャクラ注、理経随順』に、『観所縁論』の引用が1か所、確認されるからである ⁹⁾。「実に、対象とは、知によって本質を決定されたものである」という文意で、自注から引かれていた。引用文は以下の通りである。

viṣayo hi nāma yasya vijñānena svabhāvo'vadhāryate (p.91, //.17)

私が使用したテキストでは、チベット語訳は次のようである。

yul zhes bya ba ni shes pas rang gi ngo bo nges par 'dzin pa yin te/ (p.2, //.11)

また、還梵は、

viṣayākhyā hi jñānena svarūpa-nirdhāraṇam/ (p.3, //.8)

であった。微妙に異なる。さらに、別の研究書 ¹⁰⁾ による還梵は、以下のようにわずかに違う。

viṣaya iti/jñānena svarūpa(m eva) nidhāryate/ (p.1, //.9)

引用の思想的意味合いは、これからの課題であろう。ただ、上の各種還梵の違いから、わかるように、『観所縁論』の原文さえ確定途上なのである。『ナヤチャクラ注、理経随順』の引用の意味も掴めない今の私には、『観所縁論』の位置付けは皆目、見当もつかない。以下のような、漠然とした事実が思い浮かぶだけである。

恐らく、陳那没後のインド仏教界では、『観所縁論』は、十分権威を持つ書であったはずだ。陳那の死後、インド仏教を牽引した学僧として、寂護(Śāntarakṣita, シャーントラクシタ)と弟子の蓮華戒(Kamalaśīla, カマラシーラ)がいる。寂護は『真理綱要』*Tattvasamgraha*を著し、蓮華戒はその注『難語釈』*Pañjikā*を書いた。同書23章は、「外界対象の考察」*Bahirartha-parīkṣā*と題され、仏教の唯識思想(vijñaptimātratā)を説いている。その末尾には、権威付けとも受け取れるように、『観所縁論』が引用されているのである。陳那の影響力が伺われる。次のように引かれる ¹¹⁾。

師ディグナーガ御前(pāda, zhal snga nas)等は、所縁々(ālabhanapratyaya, dmigs pa'i rkyen、認識の原因)を設定するために、〔『観所縁論』第6偈で〕述べた。「内面の知

られるもの (jñeya, shes bya) の像 (rūpa, ngo bo) とは、外界のように現れる何かであり、それが対象 (artha, don) である。知の像である故に。その原因自体でもある故に」と。実に、これによって、認識される部分 (grāhyāṃśa, zung ba'i cha) が、対象 (viśaya, yul) として設定されることが説明されたのである。

ācāryadignāgapādair ālambanapratyayavyavasthārtham uktam—“yad

antarjñeyarūpaṃ tu bahirvad avabhāṣate/so 'rtho vijñānarūpatvāt

tatpratyayatayāpi ca/'iti/anena hi grāhyāṃśo viśayavyavasthā pratipādītā/ (G.O.S,p.582, ll.11-13, B.B.S.p.497, ll.2-5) ¹²⁾

slob dpon phyog kyi glang po'i zhal snga nas kyis/dmigs pa'i rkyen nram par gzhag par bya ba'i phyir/nang gi shes bya'i ngo bo ni//phyi rol ltar snang gang yin te//don yin nram shes ngo bo'i phyir//de rkyen nyid kyang yin phyir ro//zhes gsungs te/'dis ni gzung ba'i cha la yul du nram par gzhag par bstan to// (デルゲ版、No.4267, 'e,130a/2-3)

そして、直後こう引用する。

さらに〔師ディグナーガは、『観所縁論』第7偈とその自注で〕述べている。「あるいは、能力が設定されるので、継時的にも、それは対象として現れる。自身と相似する結果を生じさせる能力であり、〔その能力は〕、知が依存物 (āśraya, rten) [= 顕現] を有するものとなすのだから、矛盾ではない」と。

これによって、連続する知 (anantarajñana) に、自身と相似する結果を生む (nimitta, rgyu mtshan) 能力を設定させるので、その顕現が原因を持つことが可能となる。

punar apy uktam—“atha vā śaktyarpaṇāt krameṇāpi so 'rthāvabhāṣaḥ

svānurūpakāryotpattaye śaktiṃ vijñānācārāṃ (read.vijñānāśrayayinīm) karotīty

avirodha'iti/anenānantarajñāne svarūpakāryotpattinimittasaktisamarpaṇāt kāraṇatvaṃ ca tasya pratibhāṣasya samartham// (G.O.S,p.582, ll.13-16, B.B.S.p.497, ll.5-8) ^{補注1)}

gzhan yang yang na nus pa 'jog phyir rim gyis kyang//don du snang ba de ni rang dang mthun pa'i 'bras bu skyed par byed pa'i nus pa nram par shes pa'i rten can byed pas mi 'gal lo zhes bya ba ste/'dis ni don gzhan ma yin pa'i shes pa la rang dang rjes su mthun pa'i 'bras bu skyed pa'i rgyu mtshan nus pa 'jog pa'i phyir so sor snang ba de rgyu nyid du bsgrubs pa yin no// (デルゲ版、No.4267, 'e,130a/3-4)

この引用に関しては、すでに意見を異とする論文も出されている¹³⁾。残念ながら、私はそれを云々する段階にはない。『観所縁論』のことも『真理綱要』「外

界対象の考察」のことも調べが十分ではないからである。時代の違う学僧達について、見解の異同を考察するのは容易ではない。そう想像する位が関の山である。そもそも、「外界対象の考察」で唯識が説かれていたとしても、そして『観所縁論』が唯識論書とされているとしても、両者の唯識が全く同じ唯識であるのかどうか¹⁴⁾？唯識の専門家、佐久間秀範氏は、こう述べている。

中国と日本の法相宗が描いてきたインド瑜伽行派の諸論師（弥勒、無着、世親、無性、安慧、護法、戒賢、陳那 etc.）間の師弟関係や系譜が、実際に表明される思想内容を精査すると、実は矛盾に充ちたものであることがわかる¹⁵⁾。

このような指摘を見ると、軽々に論じることがためらわれる。さらに、私の頭には、次のような指摘が木霊して止まないのである。

陳那と Vātsīputrīya（犢子部）との関係ははっきりしない。〔チベットの仏教史家〕プットンやターラナータは、陳那が、どのように、犢子部の教義を嘲笑したかという逸話を伝えている。ある日、陳那は、服を脱いで、ブドガラを探すために四方で火を焚いた、ブドガラとは、身体の構成要素〔五蘊〕と同一でもなく異なったものでもない実体として犢子部が認めたものである。ブドガラを見つける代わりに、師を怒らせただけだった、間もなく、彼は、犢子部を離れた。しかし、陳那の著書には、犢子部に対する反論はみつからない。この部派は、世親の『俱舍論』9章で批判された。陳那は、この世親の著作の綱要書、すなわち、『俱舍論 要義灯論』を作った。始めの8章では、陳那は、世親の中心的議論に順じている、付随的な議論を扱う部分、他学派の理論や他のテキストの単なる引用を除いてであるが。しかし、9章では、世親の大部分の議論を省いている、それは犢子部のブドガラ批判についての議論である。そして、何ら本質的でない議論を再現している。もし陳那が、犢子部に属していて、後にそのブドガラの教義を捨てたのなら、彼は、もっとこの部派の教義の欠陥を指摘するのに真剣であるはずだ。ブドガラ批判は、陳那の学流に属す寂護の『真理綱要』にも見られるが、陳那の見解に触れることはない¹⁶⁾。

私は上の指摘に導かれて、陳那や法称を見なおしてみた。結果、次のように考えるに至った。「陳那は犢子部的要素を最後まで保持していた。そしてその犢子部的思想継承者が、法称ではないか」¹⁷⁾と。学界での反応は伝わってこない。しかし、これが奇を衒った、荒唐無稽な考えなのか？断定は出来ないだろう。そういう視点で『観所縁論』を考察するとどうなるのか？¹⁸⁾

注

- 1) 山口益・野澤静證『世親唯識の原典解明』2011年新装版 (rep. of 1953) 卷末 pp.2-13 には、チベット語訳および還梵が付されている。さらに本文 pp.424-484 には調伏天 (Vinīta-deva, ヴィニータデーヴァ) の注釈を含めた注記があり。適宜、参考にした。
- 2) 何歎歡「陳那」の名称に関する考察『国際仏教学大学院大学研究紀要』21、平成 29 年、pp.162-195。
- 3) 前掲注 2) の何論文 p.207、〔 〕内は私の補足。
- 4) 知る人ぞ知る有名な書である。正確に言えば書名はさらに長い。『12 幅観点論』あるいは『12 幅ナヤチャクラ』*Dvādaśāraṃ Nayacakram* である。出版年等は、Muni Jambūvijayaḥ ed.: *Dvādaśāraṃ Nayacakram*, pt.1-3, Bombay, 1966-1988. 作者はマッラヴァーディン (Mallavādin)。3 巻本である。第 1 巻には、世界的な学者フラウワルナー (E.Frauwallner, 1898-1974) のイントロダクション (pp.1-6) が付されていて、彼はこう述べている。

哲学上の情報が、極めて欠如している時代に遡って、我々が、知る由もない著書や著者に関する多くの新情報をもたらしてくれる。少しの例を出せば、マッラヴァーディン [の『12 幅ナヤチャクラ』] 第 1 章や第 8 章には、仏教の認識論学派の開祖、ディグナーガの著作の断片が多数保存されている。彼の著作を、我々は、部分的に、チベット語訳や漢訳から知るしかないのに。(p.5、〔 〕内私の補足) また出版者ムニ・ジャンブーヴィジャヤ (Muni Jambūvijaya, 1923-2009) も有名な学者である。彼のサンスクリット語序論には、こうある。

仏教思想 (bauddha-mata) を扱う (prastāva) に当たって、刹那論 (kṣaṇikavāda) ・ 識論 (vijñānavāda) ・ 空論 (śūnyavāda) 等多くの議論について、ここで考察する。論蔵である品類足論 (prakaraṇapāda) 等のサンスクリット語の仏教のアーガマのうち、アールヤデーヴァ作『四百論』から、世親著『俱舍論』から、陳那著『集量論』・『注釈』・『正理門論』・『観所縁論』・『解捲論』・『アポーハ対境論』等の多くの著書から、そして他の著書から、ここに、語句 (pāṭha) を引用した。

bauddhamataprastāve kṣaṇikavāda-vijñānavāda-śūnyavādādīyanekavādānām carcātra vilokyate/abhidharmapiṭaka-prakaraṇapādādisamskṛtabauddhāgamebh ya āryadevākṛtacatuḥśatakatād vasubandhupraṇīṭābhidharmakośād dinnāgaracita-pramāṇasamuccaya-vṛtti-nyāyamukha-ālanbanaparīkṣā-hastavālaprakaraṇa-apohaviṣayaka-prakaraṇādyanekagranthebhyo 'nyagranthebhyas ca pāṭhā atrodvṛtāh/ (p.21, ll.5-8)

最後の『アポーハ対境論』は、調べても不明だったが、私の無知のせいなのかもしれない。また、ムニ・ジャンブーヴィジャヤは、'Mallavādi: The Great Jaina Logician' と題し、『金倉博士古希記念 印度学仏教学論集』1966 年、pp.73-78 に寄稿している。論文の末尾には、こうある。

マッラヴァーディンは、クマーリラ、プラバーカラ、イーシヴァラクリシュナにどこにも言及していない。従って、彼は彼ら以前ディグナーガ (Diṅnāga) 以後、活躍したに違いない。(p.78)

ムニ・ジャンブーヴィジャヤは、陳那をディグナーガ (Diṅnāga) と呼んでいる。

論文では終始そうである。

- 5) この個所は、服部正明氏の『陳那の知覚論』で引用されている。Masaaki Hattori: *Dignāga on Perception, being the pratyakṣapariccheda of Dignāga's Pramānasamuccaya from the Sanskrit fragments and the Tibetan Versions*, Cambridge, Massachusetts, 1968, p.3, note.9.
- 6) 前掲注5)の服部本 pp.32-35の英訳とその注参照。そこでディグナーガは、『論軌』の著者が世親であることを否定している。原田和宗「VasubandhuとDignāgaの交渉(一) — VādavidhiとĀlambanaparīkṣā 雑考一」『仏教学学報』14, 1989, pp.47-52は、フラウワルナー説を取り上げ、『観所縁論』の『論軌』への高い依存度を指摘する。また、佐久間秀範氏は、以下のようにまとめている。

陳那が『俱舍論』の作者世親を継ぐものと考えられるのは、彼の『観所縁論』の内容が明らかに〔世親作〕『二十論』の内容を下敷きにし、それを教義内容として進めた内容となっているからである。しかし陳那が世親に直接会って教えを受けたかどうかは少し疑問がある。それは陳那作『集量論』の中で、世親作とされる『論軌』(現存しない)について言及しながらも、本当にこれが世親の著作か否かで逡巡するからである。それでも他の論師と比べると、かなり世親との時間的距離の近い人物とみられる。(佐久間秀範氏「瑜伽行唯識思想とは何か」『シリーズ大乘仏教7 唯識と瑜伽行』2012所収 p.31)

さらに、世親と陳那については、小林信彦氏によって、詩(kāvya)を論ずるBhāmahaに引用があることが指摘されている。小林氏は、『集量論』と『論軌』からの引用を指摘し、以下のようにまとめている。

1) Bhāmahaの典拠はDignāgaとVasubandhuである。2) Dignāgaを主としVasubandhuを従とするが、特にVasubandhuを批判することもない。3) Dharmakīrtiの影響は全く見られない。(小林信彦「Bhāmahaに引用されるDignāgaとVasubandhu」『印度学仏教学研究』25-2, 1977, p.893)

『ナヤチャクラ』に見られる扱い方を彷彿とさせるものの、両者の軽重は『ナヤチャクラ』とは違う印象である。

- 7) 太字は、注の対象『ナヤチャクラ』本文である。
- 8) ターゲットとされた個所は、以下の部分である。

この色形(rūpa)は多数である、と説かれる。そ〔の色形〕において、ある時は、1つの〔色形を〕素材(dravya)として、視覚が起こる。その時は、その種類(prakāra)に対する識別(pariccheda)がある。〔また〕、ある時は、多数〔の色形を素材として視覚が生じる〕。その時は、〔種類の〕識別はない。例えば、多くの色彩(varṇa)と形態(samsthāna)を有する軍隊の陣容(senāvīyūha)や〔多くの〕山成す(samūha)宝石を遠くから見る人に〔生ずる視覚は、一々の種類を識別して見ない〕ようなものである。

(櫻部建『俱舍論の研究 界・根品』2011年新装版(rep. of 1969), pp.153-154の訳を参照した)

yad etad bahuvidhaṃ rūpam uktam, tatra kadācid ekena dravyeṇa cakṣurvijñānam ut-

padyate yadā tatprakāravavyavacchedo bhavati/kadācid bahubhir yadā na vyavacchedaḥ, tad yathā-senāvīyūham anekavarṇasamsthānam maṇisamūham ca dūrāt paśyataḥ/ (ed. by S.D.Sastri, p.29,l.11-13, ed. by P.Pradhan, p.7//.18-20)

これが『ナヤチャクラ』では、以下のように、幾分形を変えて引用される。

さらに、『俱舎論』で語られたことは、[以下のものである]。「この多種類に区分されたもの云々について言う。しばしば、多くの色彩と形態を見る時、[1つの] 素材 (dravya) によって、視覚が起こる。その際、青等その種類を識別する (vyavaccheda) のである。ある時は、[同じく] 多数 [の素材] によって、[視覚が起こるが]、その際、その種類の識別はない。例えば、遠くから、多くの色彩と形態を有する、山成す (samūha) 宝石を見つつあるように]

yac cāpy abhihitam abhidharmakoṣe yad etad anekaprakārabhinnaṃ ity ādi yāvad anekavarṇasamsthānam paśyata dravyeṇa cakṣurvijñānam utpādyate yadā nīlādītatprakāravavyavacchedo bhavati, kadācid anekena yadā na tatprakāra-vyavacchedaḥ, tad yathā dūrān maṇisamūham anekavarṇasamsthānam paśyataḥ// (p.78,l.9-p.79,l.2)

『俱舎論』では、この後、因明の重要術語、自相 (svlakṣaṇa) 共相 (sāmānyalakṣaṇa) に関する記述が続く。世親の考え方に、後に陳那は一石を投じた。その点については、野武美弥子・坂井淳一・滝川郁久『『俱舎論』安慧註における自相と共相』『東洋の思想と宗教』13,1996 参照。

- 9) 伊藤康裕『Ālambanaparīkṣā における Ālambana』『久遠』3、2012、p.29、の注 13 にも『ナヤチャクラ注、理経随順』における引用は指摘されている。引用偈がどのような文脈で提示されているのか、詳細はわからないが、テキスト前の目次 (p.90) を見るとこれは「陳那想定の知覚に関する批判」(dinnāgakalpitapratyakṣe doṣaḥ) (pp.85-103) の中に引かれ、続く「唯識という仏教思想の論難」(vijñānavādabuddhamatanirāsa) (pp.103-107) 中に引用されていない。
- 10) アイヤスヴァミ・シャストリ (N. Aiyaswami Sastri) 『陳那・観所縁論と注、護法注添付』N. Aiyaswami Sastri: *Ālambanaparīkṣā and Vṛtti by Dinnāga with the commentary of Dharmapāla*, Fremont, California, (rep. of 1942)、同書は『観所縁論』の還梵・英訳、調伏天注の英訳、そして漢訳の護法注の還梵・英訳を示した。加えて、インド思想界での反応にも触れ、著名なクマーリラ (Kumārila) の引用等を明らかにした。
- 11) 引用されている『観所縁論』の偈等については、注 1) の山口・野澤本が発見の経緯をこう報告している。

プーサン [ド・ラ・ヴァレ・プサン、Louis de la Vallée-Poussin,1869-1938] 教授が、Gaekward 東洋叢書中のタトヴ・サングラハ (Tattva-saṅgraha) の梵本 (一九二六年版) をやつとその頃入手して、その梵本の五八二頁の蓮華戒のタトヴ・サングラハの註中に観所縁論第六偈及び第七偈第二句の長行釋、並びに第一偈の歪曲せられた形のものを見出したのでそれを指示し、(p.412、[] 内私の補足)

第 6 偈に関しては別の情報もある。宇井伯壽氏は、こう報告している。

この頌の前半は、又、サルブ・ダルシャナ・サングラハ (Sarva-darśana-saṅgraha 全哲學攝要) の佛教の章に引用せられて居る。そこでは少し異なつて、

「すべての内の所知の實性たるものが、外の如くに顕現する、」

“yad antarjñeyatattvaṃ tad bahirvad avabhāsate”)

となつて居る。所知といふのは知られる対象といふことであるが、前者〔『真理綱要』〕では、知られる対象としての色、となし、後者〔『全哲学綱要』〕では、知られる實性、となしたのである。タトワ (tattva) は通常實性と譯されるから、暫らくかく譯出したが、然し、ここでは、さほど深遠な意味ではなくして、文字通りのそれたるもの、又、それ、といふ程の意味に相違ないことは、前者に色とあるものの異字たるに過ぎぬ點で、よく判る。従つて、内の所知たるもの、の意味である。(宇井伯壽『陳那著作の研究』1979 (rep. of 1958) , p.73, [] 内私の補足) 実際に手許の『全哲学綱要』*Sarva-darśana-saṃgraha* の仏教章を見てみると、確かに、yad antarjñeyatattvaṃ tad bahirvad avabhāsate (M.V.S.Abhyankar ed. *Sarva-darśana-saṃgraha*, Poona, 1978, p.35,l.3) とあった。

また、『全哲学綱要』「仏教章」には、中村元氏の訳注研究があり、この第6偈は「(識)の内部にある所知そのものが、外界の対象のごとくに似現する」と訳されている。(中村元「仏教概説—Sarvadarśanasamgraha 第二章翻訳—」『三康文化研究所年報』8 昭和50年、p.28) さらに注122には『観所縁論』からの引用であると指摘している。またシャンカラも引用していると指摘するが、その個所は示していない。(p.52)

- 12) テキストの詳しい説明は以下の通り。G.O.S: E.Krishnamacharya ed. *Tattvasaṅgraha of Śāntaraḥṣita with the Commentary of Kamalaśīla*, Vol.I, Baroda,1984 (rep. of 1926) , Gaekward Oriental Seires No.XXX, B.B.S: S.D.Śāstrī ed., *The Tattvasaṅgraha of Ācārya Śāntaraḥṣita with the 'Pañjikā' Commentary of Ācārya Śrī Kamalaśīla*, Vol.II, Varanasi, 1997, Bauddha Bharatī Series 2.
- 13) 西沢史仁「カマラシーラのディグナーガ批判—唯識性の理解を巡って—」『インド哲学仏教学研究』3,1995、Matsuoka Hiroko (松岡寛子) ‘On the *Ālambanaparīkṣā* as Cited into the *Bahirarthaparīkṣā* of the *Tattvasaṅgraha*’ 『印度学仏教学研究』60-3,2012、西沢氏は「最も基本的な唯識性の理解に関して、シャーンタラクシタとカマラシーラが、ディグナーガ (Dignāga) と根本的に相違する立場に立っており、かつ、そのことをカマラシーラは、ディグナーガの *Ālambanaparīkṣā* (AP) 及びその自注 *Ālambanaparīkṣāvr̥tti* (APV) を引用して明言していることを明らかにしたい」(p.17) と述べ、これに対し、松岡氏は「西沢氏の見解は正しいものではないこと、そして、カマラシーラがどのように『観所縁論』を解釈しているのかを示したい」(p.1242) と反論する。両論文ともネットで披見可。
- 14) まず、『真理綱要』「外界対象の考察」を読むことから始めようと考えている。現段階で参照出来ている先行研究は、太田心海「認識の対象に関する考察 *Tattvasaṅgraha Bahirarthaparīkṣā* の和訳研究 (上)」『佐賀龍谷大学紀要』14,1968、同「認識の対象に関する考察 *Tattvasaṅgraha Bahirarthaparīkṣā* の和訳研究 (下)」『佐賀龍谷大学紀要』17,1970、菅沼晃「『撰真實論』外境批判章訳註『勝又俊教博士古希記念論集 大乘仏教から密教へ』1981、同「『撰真實論』外境批判章訳註 (二)」『壬生台舜博士頌寿記念 仏教の歴史と思想』1985、G.Jha tr. *Tattvasaṅgraha of Shāntaraḥṣita with the*

Commentary of Kamalashila, Delhi, 1986 (rep. of 1939)である。このうち Jha の英訳には、誤訳も見られた。菅沼論文は、チベット語訳も参照し、Jha の誤訳を指摘出来るはずなのに、それが無い。太田論文は、偈を中心としたものである。

- 15) 佐久間秀範「法相宗所伝のインド瑜伽行派諸論師の系譜の再考」、平成 23 年度科学研究費助成事業研究成果報告書より、ネットで披見出来る。
- 16) 前掲注 5) の服部本、p.2、〔 〕内私の補足。
- 17) 拙稿「dravyasat・prajñaptisat 覚え書き」『インド論理学研究』III 平成 23 年参照。

私の考えは、以下の記述により触発されたものであった。ツォンカバ (Tsong kha pa, 1357-1419) の『量の大備忘録』*Tshad ma'i brjed byang chen mo* には、こう認めてあった。

〔法称作『量評釈』*Pramāṇavārttika* の二諦と〕〔世親作〕『俱舎論』(*mDzod, Abhidarmakośa*) で説かれた二諦と設定法は一致しない、つまり、そこ〔=『俱舎論』「賢聖品」*mārgapudgalanirdeśa* 第 4 偈〕では、壺等は破壊によって、その〔壺の〕認識は廃棄可能である〔そういったものを〕世俗諦と位置付ける。一方、ここ〔=『量評釈』「知覚」*pratyakṣa* 章第 3 偈〕では、〔目的達成能力のある (arthakriyāsamārtha, don byed nus pa)〕自相によって成立しているものを勝義として成立していると位置付ける。故に、そこ〔=『俱舎論』〕では〔全体たる壺が、部分に破壊可能であるという観点から、その壺は〕世俗の実例であると説明されるけれど、ここ〔=『量評釈』〕では、〔目的達成能力を持つという観点から、同じ、全体たる「壺」を、〕勝義の実例であると位置付けるのである。

mdzod nas bshad pa'i bden gnyis dang 'jog tshul mi gcig ste/de nas bum pa la sogs pa bcoms pas de'i blo 'dor du rung ba la kun rdzob tu bzhag la/'dir rang mtshan nyid kiyis grub pa la don dam par grub par bzhag pas der kun rdzob kyi mtshan gzhir bshad kyang/'dir don dam pa'i mtshan gzhir bzhag pa yin no// (*The collected works of rJe Tson-kha-pa Blo-bzan-grags-pa*, vol.22, Pha, 34/2-3, folio.218)

ここでは、世親と法称の「部分と全体」観、仏教的表現をすれば「二諦」観が逆であることが示されている。陳那の名はないが、私は法称に反世親の考えを植え付けたのは、陳那であると見ている。さらに、陳那の犢子部の要素を思わせる研究を紹介しておきたい。櫻部建氏は、陳那の『俱舎論』注に関して、こう述べている。

ところで、興味深いことに、最後の〔第 9 章〕破我品だけは右に述べたような仕方に従っていない。そこでは原俱舎論破我品の八分の一程にまで縮められ、その摘要の仕方も、本論の論述の本筋を追って忠実に abridgment を作したというのではなくて、原破我品に論ぜられている多数の論点の中で特に興味を引く数個の問題だけを採り出して並べ挙げているもののように見える。(櫻部建「陳那に帰せられた俱舎論の一綱要書」『東海仏教』2, 1965, p.35,〔 〕内私の補足)

陳那が、どこに興味を示したか、については、福田琢氏が以下のように説明している。すなわち陳那は破我品から①ブドガラなくして仏が一切知とされる根拠、②命者についての經典の無記をめぐる解釈、③識と相続にかんする議論、④無我説における業因・業果の関連性という四つの主題だけを取りあげ、他を捨てているので

ある。①と②は犢子部③と④は仏教以外の学派に対する批判から採られている。(福田琢「書評・紹介 Marek Mejer: *Vasubandhu's Abhidharmakośa and the Commentaries Presented in the Tanjur*」『仏教学セミナー』6,1994,p.83)

- 18) 諸研究に共通するのは、陳那が唯識派の大立者であるとする点である。前掲注1)の山口・野澤本では、こう述べている。

唯識派に於ける陳那といふものは、観所縁論によつてともかく代表せられることになるであろう。吾々が本書に於て、世親の唯識二論とともに観所縁論をも提示することは、さういふ点からも意味のあることであらうと思ふ。(p.421)

前掲注11)の宇井本では、以下のように言う。

此の如く、陳那が唯識派に於て重要であり、因明に於て無比のひとつであるから、必然的に其の系統が正理に従ふ唯識派となるのであろうが、・・・正理の適用せられる唯識説は依然として無著、世親に其源泉を有するもので、其點に於て唯識派たるのであるが、然し其古い説に對して、陳那並びに其の系統が如何に攻究發展せしめたか闡明せられねばならぬのであり、従つて、其闡明が唯識派即ち瑜伽行派の發達の一面を示すことになるのである。(p.5)

前掲注10)のシャストリ本では、次のようにある。

『観所縁論』は、中世インド論理学の父たる、陳那師がものした特定の主題に関する小編の1つである。論は、標題の示すように、「所縁」即ち認識対象の実相について探求を開始する。著者は、實在論者の立場の考察を通じ、・・・彼らの考えが承認し難いことを証明し、我々に現れるような「所縁」は、實在せず、識のみが實在することを確定した。彼の先達、無著や世親2人の瑜伽行派の卓越した師によって奉ぜられた教理である。(xi)

過去の代表的見解では、陳那は何よりも唯識派の論師なのである。最近の研究書『虚妄分別とは何か—唯識説における言葉と世界—』でも、著者小谷信千代氏は、この考え方を踏襲し、こう述べている。

調伏天 (Vinīta^{じんらふ}deva, ca.645-715) は周知のように世親の『三十頌』の安慧釈に復釈をしているが、陳那 (Dignāga, ca.480-540) の『観所縁論』にも注釈をしている。『三十頌』と『観所縁論』とに対する調伏天の注釈には、外界實在論者と瑜伽行派との間で外界の實在・非實在を巡ってどのような論争がなされたかが詳細に記されている。・・・『三十頌』と『観所縁論』の注釈に詳しく説明されるような外界實在論者に対して展開された・・・瑜伽行派の反論が前提として想定されているものと考えられる。このような前提を知らずには『中辺論』の安慧の注釈を正しく理解することはできない。(p.20)

しかし、次に示すような多面的見方もある。最新の概説書で、久間泰賢氏は言う。

フラウヴァルナーが〔『陳那、その作品とその發展』 Dignāga, sein Werk und seine Entwicklung で〕想定する、ディグナーガ〔陳那〕の思想的遍歴の成り立ちは、物理的・外発的要因よりも、むしろ内発的要因、すなわち彼の思想的動機に依拠している度合がより高まるであろう。(久間泰賢「後期瑜伽行派の思想—唯識思想と外界實在論との関わり」『シリーズ大乘仏教7 唯識と瑜伽行』2012所収 p.231,〔 〕

内私の補足)

最後に、陳那の実像を考える上で、重要な指摘を示しておきたい。袴谷憲昭氏は、以下のように述べている。

Dignāga〔陳那〕の偉大さ故に、その認識論あるいは論理学上の影響は唯識派内部の学匠たちに、学系のいかに問わず、あったと思われる。それ故、その影響をとどめる用語の使用があるからといって、逆に、Dignāga〔陳那〕の学系に属することを証したことにはならない。(袴谷憲昭『唯識思想論考』2001,p.785の注(93)〔 〕

内私の補足)

陳那は、唯識派たらんとしたのではなく、後代に唯識派に組み込まれた可能性さえ見えるのである。意識の中では、犢子部であったかもしれない。

令和2年、パンデミックの初夏、脱稿

補注1)

- 1) テキストを訂正して読んだ。訂正箇所は()内である。注12)で示した両テキストとも‘vijñānācāram’であるが、チベット語訳では‘rnam par shes pa’i rten can byed pas’である。注1)の山口・野澤本の還梵は‘vijñānāśrayayinīm’ (p.11)で本稿ではそれに従った。注10)のシャストリ本の還梵は‘vijñānādhārām’ (p.6)である。注14)で示したG.Jhaの英訳は‘a potency in the Cognition’ (p.987)である。G.Jhaの見たテキストは‘vijñānācāram’であろう。しかし、梵文テキストだけからG.Jhaのような訳が可能なのか私にはわからない。注13)の西沢論文では「知を所依(jñānādhāra)とする」(p.19)とある。いずれにしても、私の選択は定見あってのものではない。

令和2年、依然としてコロナ禍の中

In memory of our beloved cat KŪ

〈キーワード〉 観所縁論、陳那、犢子部